

作文・絵作文コンクール
優秀作品集
(令和4年度版)



全国の附属学校園の子どもたちが先生との思い出や感謝の気持ちを
作文・絵作文で表現したものを一冊の作品にまとめました。



一般社団法人 全国国立大学附属学校PTA連合会

ご挨拶

平素は（一社）全国国立大学附属学校PTA連合会の事業にご理解とご協力を賜り厚く御礼申し上げます。「作文・絵作文コンクール」の開催および優秀作品集の発行にあたり、主催者を代表して一言ご挨拶を申し上げます。

今年で第5回目を迎えた「作文・絵作文コンクール」は、わが国の教育を支えて下さっている教職員の皆様へ感謝の気持ちを届けたい、そして、その感謝の気持ちを表す「教師の日」の制定へ向け、国立大学附属学校のPTAとして支援する目的で企画・開催されてきました。

今年度はこれまでで最も多い作品の応募をいただき、コロナ禍の中でも子どもたちが学校で様々な経験をし、成長している姿が想像できる作品が多く見受けられました。

この3年間、コロナ禍で時を過ごした子どもたちにとって、従来通りの学校生活を送ることが出来なかった事にとっても残念な思いもありますが、これまでに誰も経験したことのない環境を乗り越えた子どもたちは、このコロナ禍でさえ、それぞれの人生の中で自分を成長させる経験となり、未来へ羽ばたいていくのだろうと信じています。

そして、そんな子どもたちのそばには、子どもたちがいつも通りの気持ちで学校生活を送れるよう寄り添い、ご尽力いただいている先生方の姿が作品の中から感じられました。

この作品集が、子どもたちから全国の教職員の皆様に感謝の気持ちとなって届きますよう、そして、教員をめざす学生の皆様にも手に取って読んでいただくことが出来たら幸いです。

最後になりましたが、本コンクールを開催するにあたり、ご多忙の中、審査委員長を快くお引き受けくださいました児童文学作家のくすのきしげのり先生に感謝の意を表するとともに、たくさんの感謝の気持ちを作文・絵作文にして応募してくれた全国の子どもたちが、これからも健やかに成長されることを、心より御祈念申し上げます。

一般社団法人 全国国立大学附属学校PTA連合会

会長 大竹 昌士



「第5回作文・絵作文コンクール」に寄せて

本年度が5回目の開催となる全国国立大学附属学校PTA連合会主催の「作文・絵作文コンクール」が、全国から多数の応募によりとても充実した企画となりましたことをお慶び申し上げます。どの応募作品も素晴らしく審査委員の先生方におかれましては、審査に大変ご苦労なされたことかと拝察いたします。

本稿を、丁度、卒業式のシーズンに書いておりますが、最近では学校の卒業式では「仰げば尊し」を歌うことが、ほとんどなくなって来ているようです。理由としては、歌詞が文語体で小中学生には、歌詞の意を理解するのが難しいと云うことが主な理由とのことでした。

しかしながら、子どもたちの作文からは、学校の先生から教わることは、単に教科の内容だけではなく、様々な物の見方・考え方、もっと大きく、子ども達自身のこれからの生き方までも、教わっているのではないかと思います。子ども達が、先生を人生の師と仰ぎ、その教えに感謝していることが伝わってきます。正に「仰げば尊し」の歌詞の意をそのままに表現しているのではないかと思います。

国立大学附属学校園には、研究能力と教授能力に優れた素晴らしい先生方が多く居られます。このような先生方をもって、各附属学校園が今後ますます、日本の学校教育を先導することを祈念いたします。

全国国立大学附属学校連盟

理事長 吉田 裕亮



「作文・絵作文コンクール」に寄せて

一般社団法人全国国立大学附属学校PTA連合会主催の第5回「作文・絵作文コンクール」が全国の幼児・児童・生徒の皆様から多数の応募を得て、大変充実した取組となったことを心よりお喜び申し上げます。

新型コロナウイルス感染症が学校生活に影を落とす一方、一人一台端末を活用した教育活動などこれからの時代を見据えた新しい教育が展開され、いま、子供たちは大きな環境変化の中にいます。こうした子供たちを学校や家庭、地域で暖かく見守り、寄り添い、導いていただいている保護者や教職員の皆様の日頃のご尽力に改めて感謝申し上げます。

教師は次世代を担う人間を育てる社会的に重要かつ不可欠の職であり、同時に、普段の教育指導を重ねる中で度々感動の涙に遭う、他ではなかなか得られないやりがい、価値のある職であります。本コンクールの入賞作品からは、全国の附属学校の現場教師の日常的な教育指導や子供たちへの声掛けが着実に豊かな心と体を育み、人格形成を促していることが伝わってきます。学校教育や教師を巡る課題も多い昨今ではありますが、本コンクールは、社会に教師の仕事の価値を改めて発信し、教師自身の志気を高めることにつながる、大変有意義な取組であると思います。

今後とも、本コンクールの更なる充実とともに、国立大学附属学校が大きく時代環境が変わる中で我が国の教育の進化に寄与する存在として発展され、発信力を高めることを祈念いたします。

文部科学省 総合教育政策局 教育人材政策課

課長 後藤 教至



会長賞

秋田大学教育文化学部附属小学校 2年 津司 昌宗

先生がまいたやさしさのたね
秋田大学教いく文が学ぶ ふぞく小学校
二年 つし まさむね
楽しみにしていたじゅぎょうさんかん日、
たくさん手をあげてがんばりました。今回は
道とくのじゅぎょうで、やさしさについてク
ラスのみんなで話し合いました。思いやりを
もつこと、親切にすること、おもいものをも
ってあげること、お年よりの手を引いてあげ
ることなど色いろな考えが出てきました。
そして、みんなの手があがらなくなつたと
ぎ、しんどうゆきこ先生が、
「自分のとくいなことを生かして、人をたす
けるのはどうか？」
と聞いてきました。たとえば、ドッジボール
のとくいな人がにがちな人をまもつてあげる
ようにです。ぼくは、自分にてきることはな
んだらうとずつと考えていました。
そんなとき、学校でわくわくおもちゃパー
クという行じがありました。生活のじゅぎょう

20 × 20

うで作つたおもちゃを見せ合つて、一年生と
いっしょにあそぶのです。ぼくは小さな空気
ほうを作りしました。谷おりにした紙のまを
つくえの上に立て、空気ほうでたおしてみん
なにあそんでもらいいます。
ところが、ぼくの考えたあそび方では上手
くいきませんでした。まどからの風や、よこ
を人が通つたときの風ですぐに紙のまとがた
おれてしまい、空気ほうの力をぜんぜん見せ
ることができません。ぼくがこまっっている
工作のとくいな友だちがやってきて、
「その紙を丸めてボールを作つて、空気ほう
のあなにのせて、とはしてみたら？」
と言つたのです。そのとおりをやつてみると
紙のボールはひゅんといきおいよくとんでい
ぎ、まわりにはいたみんなもおどろきました。
それから、ぼくの空気ほうはみんなのちゅ
うもくをあつめて、一年生のみんなにもいっ
ぱい楽しんでもらえました。
みんなに空気ほうの力を見てもらえたこと

20 × 20

や楽しくあそんでもらえたことは、もちろんうれしかったです。でも、もっとうれしかったのは、こまっっているぼくを見た友だちが、当たり前のようにたすけてくれたことです。家に帰ってから、このことをお父さんとお母さんに話しました。すると、
「その友だちがしてくれたことは、しんどう先生が言っていた『自分のとくいなことでも人をたすける』ってことだよね。」
と、せつ明してくれました。
「ぼくも友だちみたいにできるかな。」
と聞くと、
「前にしんどう先生が『まさむねさんは自分からすすんでゆかのゴミをすてて、教室をきれいにしてくれています』ってほめてたよ。だから、まさむねもとくいなさうじでみんなをたすけることができているんだよ。」
と、教えてくれました。
つまり、しんどう先生が言っていた自分のとくいなことでも人をたすけることの答えは、

20 × 20

ぼくの中にあつたのです。ぼくにあってそうじは、みんなに自分を見てもらいたくてやっていたことではなく、やって当たり前のことでした。わざわざ人にやさしくしてあげようとしなくても、自分にできる当たり前のことをしていてだけで、気づかないうちにだれかをたすけることができていたのです。
ぼくのクラスでは毎日、しんどう先生がぼくやクラスみんなに声をかけてくれます。学校の行き帰りにあぶないことはないか、友だちとなかよくできているか、などです。これは、しんどう先生にとっては当たり前のことなのかもしれません。でも、そんな当たり前前のやさしさがぼくたちをたすけてくれたと思います。そして、先生のやさしさをうけたクラスのみんながおたがい声をかけ合い、やさしいクラスが作られています。
ぼくのクラスには、しんどう先生とみんなのやさしさがいっぱいあります。そんな二年B組のことが、ぼくは大好きです。

20 × 20

～くすのき先生からのひと言～

いろいろな「やさしさ」について話し合った道徳の授業。空気ほうの遊び方の改良について友達がアイデアを出してくれたことは、「自分の得意なことを生かして人を助ける」ということでしたね。そして自分にできることを考え、「自分にできる当たり前のことをしているだけで、気づかないうちにだれかを助けている」といった、とても大切なことに気づくことができましたね。先生も、そして子どもたちも一人ひとりが、自分にできる「やさしさ」の発揮のしかたで、素敵なクラスになっていることが伝わってきました。

優秀賞 絵作文

鹿児島大学教育学部附属幼稚園 年少 瀧瀬 ひかり



学校名 鹿児島大学教育学部附属幼稚園 名前 瀧瀬 ひかり

て	て	と	と	な	で	で	た	き	う	の	あ	ム	や	で	り	リ	鹿
ハ	ハ	ツ	ツ	ア	モ	モ	タ	キ	ウ	ノ	ア	ム	ヤ	デ	リ	リ	大
ル	ル	ツ	ツ	ア	モ	モ	タ	キ	ウ	ノ	ア	ム	ヤ	デ	リ	リ	附
ン	ン	ツ	ツ	ア	モ	モ	タ	キ	ウ	ノ	ア	ム	ヤ	デ	リ	リ	属
ダ	ダ	ツ	ツ	ア	モ	モ	タ	キ	ウ	ノ	ア	ム	ヤ	デ	リ	リ	幼
ラ	ラ	ツ	ツ	ア	モ	モ	タ	キ	ウ	ノ	ア	ム	ヤ	デ	リ	リ	稚
ウ	ウ	ツ	ツ	ア	モ	モ	タ	キ	ウ	ノ	ア	ム	ヤ	デ	リ	リ	園
マ	マ	ツ	ツ	ア	モ	モ	タ	キ	ウ	ノ	ア	ム	ヤ	デ	リ	リ	年
ハ	ハ	ツ	ツ	ア	モ	モ	タ	キ	ウ	ノ	ア	ム	ヤ	デ	リ	リ	少
チ	チ	ツ	ツ	ア	モ	モ	タ	キ	ウ	ノ	ア	ム	ヤ	デ	リ	リ	は
ガ	ガ	ツ	ツ	ア	モ	モ	タ	キ	ウ	ノ	ア	ム	ヤ	デ	リ	リ	ま
タ	タ	ツ	ツ	ア	モ	モ	タ	キ	ウ	ノ	ア	ム	ヤ	デ	リ	リ	ほ
の	の	ツ	ツ	ア	モ	モ	タ	キ	ウ	ノ	ア	ム	ヤ	デ	リ	リ	う
し	し	ツ	ツ	ア	モ	モ	タ	キ	ウ	ノ	ア	ム	ヤ	デ	リ	リ	つ
み	み	ツ	ツ	ア	モ	モ	タ	キ	ウ	ノ	ア	ム	ヤ	デ	リ	リ	か
で	で	ツ	ツ	ア	モ	モ	タ	キ	ウ	ノ	ア	ム	ヤ	デ	リ	リ	い
す	す	ツ	ツ	ア	モ	モ	タ	キ	ウ	ノ	ア	ム	ヤ	デ	リ	リ	い
す	す	ツ	ツ	ア	モ	モ	タ	キ	ウ	ノ	ア	ム	ヤ	デ	リ	リ	い
。	。	ツ	ツ	ア	モ	モ	タ	キ	ウ	ノ	ア	ム	ヤ	デ	リ	リ	い

20 × 20

～くすのき先生からのひと言～

歌がじょうずな先生。ダンスがじょうずな先生。
毎日の活動のなかで、みんなを笑顔にしてくれる魔法使いのような先生方や友だちとの
楽しいようすが描かれています。

優秀賞 絵作文

静岡大学教育学部附属浜松小学校 2年 内藤 太智



学校名 ふそくはままつ小学校 名前 内とうち

ツマグロヒョウモンから学んだこと
 静岡大学教育学部附属浜松小学校
 二年 内とう 太智

ほくたちの教室では、いろいろな生きものを育てています。谷つ先生は、ほくたちが自由を考えてお世話をすることをいつも見申、てくれていきます。

谷つ先生は、虫は少し苦手です。でも、花だんのパンジーにいたツマグロヒョウモンをつかまえてきてくれました。ほくたちでえさをしらべてあげたり、学校か休みの日には交代でもち帰ってお世話をしたりかせぎにんをも、育てることかできました。

ツマグロヒョウモンは、さなぎからせい虫にはなれず、死んでしまいました。その時はさんねんでおかしいさもちにな。たけど、生きもののいのちは、かぎりあるからこそ、毎日のお世話が大切であることを学びました。生きものから、大切なことを学びました。

谷つ先生、いつも見申、てくれてありがとう。

～くすのき先生からのひと言～

虫が少し苦手な先生が、見つけてきてくれたツマグロヒョウモン。限りある命を大切にすることを学んだのですね。観察をしながらお世話をしている様子が伝わってきます。

優秀賞 絵作文

福岡教育大学附属福岡小学校 3年 佐藤 湊人



学校名 福岡教育大学附属福岡小学校 名前 さとうみなと

元気な音をありがとう
 福岡教育大学附属福岡小学校
 三年 さとう 湊人
 「ポロツポロ」はぼくの学校のチャイム
 は校歌になってる。ぼくは音が大好きだ。
 音を聞くと、不安な気持ちやぐらぐらい気持ちが
 風の上うに消える。
 ぼくは昔、ピアノを習っていたけど、その
 ころはたろろ、ていさだけで楽しくながった
 たから少ししたってやめてしまった。
 ぼくのたんにんのがん先生は、声が大まか
 て陽気な音楽の先生だ。授業の時ひいてく
 たピアノの音色がともまねいで、ぼくはも
 う一度ピアノを弾きたいと思った。がん先生
 が何かをき、たわけではないけれど、先生の
 音がぼくをもう一度ピアノにさそ、てくえな
 いのも明るく太陽のようないくのがん先生
 をから、元気をきをぼくにまたえてくれる。
 ぼくもいつか先生のように、人に元気をあた
 える音を、がたであらえるような人になりたい。

20 × 20

～くすのき先生からのひと言～

声が大きくて陽気な音楽の先生が弾いてくれたピアノの音色。(もう一度ピアノを弾きたい)
 (もっとうまくなりたい) きっとみんなの心にあるいろいろな思いに響いたのでしょね。

優秀賞 絵作文

福岡教育大学附属小倉小学校 5年 小松 理一郎



学校名福岡教育大学附属小倉小学校 名前小松 理一郎

発表は、意思表示！
福岡教育大学附属小倉小学校
五年 小松 理一郎
ぼくは、五年生になつて変わったことがある。それは、人とのコミュニケーションをとることが少し上手くなったことだ。でも、何でだろう。ぼくがだした答えは、五年で担任になった本田先生の発言があったからだ。
「発表は、意思表示だ。」
という言葉だ。た。ぼくは、発表をする時、周りの人に、理解してほしいという気持ちをもめて発表することに努めた。すると、不思議なことに自りすすんで発表をできるようになった。友達と話すことも増えた。ここだ。そうなることで学校が好きになった。これこそがすばらしい関係だ。本田先生がいなかったら今までのぼくは、たかもしれない。笑。たり怒。たりしてくれる先生。そこには先生の底知れぬ愛情があるだろう。ありがとう。本田先生。

20 × 20

～くすのき先生からのひと言～

「発表は意思表示だ」先生のこの言葉は、文字通りコミュニケーションの基本ですね。先生との楽しい授業の様子が描かれています。

優秀賞 作文

福岡教育大学附属小倉小学校 1年 林 さくら

なかがよし
いっくおかきょういっく大学、そく小くら小学校
入學しきの日、わたしは、ともたちでできる
かたせんせいとわくはないかな？ べんきょう
ちゃんどわかるかな？ と、どきどきしていま
した。そのどき三しませんせい、学校んも
くひょうの「なかがよし」のはなしをしてくれ
ました。せんせいは、小倉校のともたちさせ
んせいやいきもの「なかがよし」になりました
しは、ういんはなとてくれました。それを聞いて
どきどきがあこしなくなりました。なぜが
どいとうみんながよく見えるこくはんの上
に「なかがよし」とかいてあるの？ みんなと
なかがよしになれそうなきがしたからです。
7月になって、お花のたねをうえました。
わたしは、4しゅるいのたねのなかがから、コ
スモスをえうんでうえました。はやくぬが出
てほしい、という気もちで水やりをしていた
ら、3日して小さくてかわいいぬが出まし

20 x 20

た。それを見てわたしは、もつと大きくそだ
ててあげたいな、とおもいました。それから
わたしは、コスモスをそだてるために、まい
日かんさつをして、水のりょうをちげうせつ
したり、天気にあわせてうえ木のばしをう
ごしたりしました。そうしていると、きれ
いにお花がさきました。それを見てわたしは
「コスモスにじぶんの気もちがつたわって、
なかがよしになれたよ、うでうれしか、たぞぞ。
11月には、うんどうかいがありました。れ
んしゅうがはじま、たどきは、おうえんが、
せんのお三三びょうしやエールがともむず
かしくて、なかながじょうずにできませんで
した。みんなであわせてみて、リズムやう
ごきがそろわなくて、バラバラになってしま
いました。わたしは、「あ、ほんばんそろこ
かな、うしんげいだなあ」と、あんになりま
した。そのあとひる休みに、おなじしろうぐみ
のらねんせいが、わたしたちのまようしつに
きて、おうえんが、せんのとっくんがはじま

20 x 20

りました。もねんせいには、三三七びょうしや
 エールのうごきやかけごえのタイミンがど
 まやさしく、いっしょうけんめいおしえてく
 れました。わたしたちもほんばんであかぐみ
 にかちたいという気もちがあつたので、もね
 んせいのアドバイスをしつかりきいて、いっ
 しょうけんめいれんしゅうをしました。おし
 えるもねんせいとおしえてもらうもねんせい
 のいっしょうけんめいな気もちがいっしょに
 なじて「なかよし」になれました。うんどう
 かいでは、れんしゅうのせいかけはつきしま
 した。みんなのかけごえやうごきがきれいに
 そろって、あかぐみにかつことができました。
 入學しきのとき三しませんせいが、ともだ
 ちやせんせいと「なかよし」になりました。う
 んどうで、もねんせいと「なかよし」になるほうほう
 をしりませんでした。でも、コスモスのかん
 さつやおせあをしたりうんどうかいのれんし
 ゅうで、もねんせいと「なかよし」にしてがん
 ばっていたらいつのまにか「なかよし」にな

20 x 20

っていました。これからもちかくにあるもの
 やいる人をよくかんさつして、じぶんでき
 ることをしたり、みんなで力をあわせたりし
 て、もつも、とものや人と「なかよし」にな
 るうとおもいます。

20 x 20

～くすのき先生からのひと言～

先生から教えてもらったたいせつな言葉「なかよし」。人だけではなくいろいろなものに、自分から心を通わせて「なかよし」になりたいと思うこと。そして「なかよし」になれたと思えることは、素晴らしいことです。

優秀賞 作文

福岡教育大学附属小倉小学校 4年 村野 生芽

考える大切さ
福岡教育大学附属小倉小学校
四年 村野 生芽
春にツルレイシの種をみんなでまきました。一年生のころから、色々と植物を学校で育てていたので、種は植えれば勝手に育つと思ていました。だけど、たんいんの白はま先生から、温度計のはかり方を習って、温度を調べると、植物や動物にとっても大切なのは水だけではないと、気温や土も大切だということを見ました。
朝、天気予ほうで暑くなるし聞いたら、水そうに氷を多く入れます。そんな日は、ツルレイシにも水をた。ぷりあげないと、土がかわいてしまします。ぼくとツルレイシは全くちがう種類だけど、自然というかんきょうの中では、にている所があ。て、ツルレイシにきょう味がわいてきました。
芽が出るのは日が当たる方からで、ぼくのツルレイシは他のよりおそくて、心配でした。

20 x 20

ぼくも、四年生の中では身長が低くて、早く大きくなりたいたいと思ているから、ツルレイシが仲間みたいと思て、いつも大きさをみては心の中で、
「ぼくのツルレイシがんばれ！」
とおうえんしていました。
一年生の時から植物を何度も育てたけど、それまで花をおうえんしたことがなくて、ツルレイシだけがどうして気になるのか、不思議でした。
白はま先生は理科の先生だけど、一回だけ道徳の学習をしてくれたことがありました。
いじりといじめのちがいをみんな話合いました。いつも仲良しの友達とぼくの意見はちがって、色々な意見にびっくりしました。
家に帰って、お母さんとも少し話してみました。お母さんの意見もぼくやみんなともちがって、こんなに近い人同士でも、大切に思ていることがちがうのは、面白いなと思てきました。

20 x 20

白はま先生はいつも答えてくれます。ぼくたちにどう思う？と聞いたら、あとはぼくたちにまかせてくれます。ヒントみたいなとか、良い意見を黒板に書いたりしてみんなの意見をまとめられます。自分の力で考えると、どうでもよか。たことも、すごく気になるし、答えにたどり着いたら、大発見の気分が味わえます。自分で考えたら、どうでもよか。た植物が仲間みたいに大切になりました。ツルレイシがぼくよりも高くのびた時、とてもうれしくて、すごいなあと感動しました。そして、ぼくも負けないくらい、もっとがんばろうと思いました。

20 x 20

友達と意見がちが。ていても、お母さんと同じ意見がちが。ていても、みんなの意見と同じように、自分の意見も大切にして、これからは色々なことを自分で考えたいです。

20 x 20

～くすのき先生からのひと言～

応援しながら育てたツルレイシ。友達の意見と違う自分の考え。植物も人間もどれ一つとして同じものはありませんが、しっかり成長している様子がよくわかります。

優秀賞 作文

福岡教育大学附属小倉小学校 5年 下谷 陽菜乃

嫌いが好きになったとき
福岡教育大学附属小倉小学校
五年 下谷 陽菜乃
わたしは、五年生になるときまでは、算数が苦手な科目の一つでした。なぜなら、わたしは、計算がそれほど早くなくて、積極的に手を挙げて発表する側ではなかったからです。算数の授業ではいつも、みんなが発表している姿や黒板を、ずっと見ているだけでした。それに、家では算数の教科書を聞くこともしていませんでした。なので、算数の宿題、特に計算問題が出る時、わたしの友達は、裏表に十分ぐらいで終わって、わたしは、裏表にわたしたしはその何倍も時間をかけて、「算数なんて大嫌い。」という一心で、宿題をしていました。五年生になって、始業式での担任の先生の発表。大好きな、た先生たちがたくさん異動してしまっただので、この先生になるんだろう。

20 × 20

という気持ちで待っていました。いよいよわたしのクラス番になり、担任は算数科担当の本田先生でした。正直、算数科担当と聞いて、結構がっかりしました。わたしは、後ろから三番目にすわっていたから、顔や身長が高いかとかは見えなかつたけど、とても声が大きかったのを覚えています。新しい教室に行くとき、わたしの心の中は、「算数科ってことは、授業参観や研究授業も全部算数なんだろうな。算数苦手なのに。」という気持ちでいっぱいでした。次の日、算数の授業がありました。でも、いつもの算数の授業より、少し楽しく感じました。それには自分でも少しおどろきました。それから算数の授業をしていくうちに、算数を楽しいなと思う気持ちが大きくなりました。すると、わたしは、少しずつ、算数の授業で手を挙げて、発表するようになりました。四年生までの授業では、めあてや見通しを発表するとき、全員が手を挙げるということはあ

20 × 20

りませんでした。本田先生は、見通しを發表するとき、發表した人が言ってくれた、大切なことやキーワードを、チヨリーの色を変えて目立たせて文字を書いてくれるなどの工夫をしてくれています。めあてを發表するとき、手が挙がらない人がいると、「めあての最後は『考えよう』を使えばいい。見通しの、文字に色を付けている部分に『考えよう』を付ければ、めあてが立つ。などのことを、教えてくれました。すると、全員が手を挙げるようになりました。本田先生がたくさんの工夫をしてくれて、みんなが手を挙げるようになり、わたしはなんだか気持ち良く、うれしい気分になりました。

わたしは、最初のところ、自分の考えを説明するとき、
 「ここが説明できないな、どう言えば伝わるだろう。」
 となる時間が、たくさんありました。そんなときでも、本田先生の授業では、次々に發表

20 × 20

がっながるので、わたしが言いたかったことをうまく言えなかったとき、みんなが言葉をっなげてくれて、説明してくれました。みんなに理解してもらい、みんなの疑問の解決案を、みんなが納得することができました。そのとき、

「發表できた。算数って楽しいな。」
 という気持ちで心がいっぱいになりました。算数は、分かることも楽しかったです。本田先生のおかげで、算数が好きな教科の一つになりました。これからも、算数の授業で、たくさん發表をして、
 「算数が好き。」という気持ちを伸ばしていきたいです。

20 × 20

～くすのき先生からのひと言～

新しい担任の先生との出会い。算数の授業での先生の工夫。みんなの協力。嫌いだった算数の授業が好きになっていく様子が、いきいきと書かれています。

優秀賞 作文

静岡大学教育学部附属静岡中学校 1年 白井 希

ずと守られていたんだ。静岡大学教育学部附属静岡中学校 1年B組 白井 希

先生は、指示を出さない。先生は、すべに返事をしない。先生は、自分の話し合い。生徒会長に立候補した。一年生の立候補は異例だ。右も左もわからない。挑戦だった。立候補するからと悩んでいた。決断した。

のは締め切り前日だ。立候補には「立候補紙」という公約を記した用紙を提出しなければならぬ。慌てて夜遅くに書き上げた。後日、候補者達の立候補紙面が公開された。私のものはA4用紙一枚で、他は大長編だった。私は「作法」を知らなかったのだ。候補者討論会に呼び出された。一部り生徒による、私の立候補紙面への集中攻撃でほとんどの時間が潰された。終了後に友達が心配して駆け寄ってくるとはなかった。

20/20

確かに調査不足だった。それは私の失敗だ。でも、「正しく」なければ何を言われても仕方ないのだろうか。悔しかった。当然のように、選挙結果は惨敗だった。落選後、今度は新生徒会長が選ぶ、副生徒会長に立候補した。前回の失敗を教訓に、何日も考えを練り、図や表も入れて、一生懸命数ページの立候補紙面を著さ上げた。その後、副生徒会長当選者と、その立候補紙面が発表された。私の名前はない。当選者立候補紙面は、A4一枚程度だった。私の落選を、聞こえるか聞こえないかの距離で、揶揄する者達が出はれた。塾の入室名簿にある私の名前に、からかうような落書きがあった。私は、そんなことをしたのだろうか。一年生のくせに生意気だということだろうか。すべてが悪い方向に行っているように感じた。苦しめた。

20/20

「決断したんだね。応援するよ。」
生徒会長立候補紙面を提出したあの日、満
面の笑みで担任の若林先生は言「た。以前、
立候補はやめようと思う」と言「た。ときには
少し悲しそうな顔をしていた。それでも先生
は、立候補したらいい」とは言わなかつた。
ただ、私が決断するのを待「ていてくれた。
散々な討論会から何日か経「た後、クラス
だよりを配布してくれた。そこには私の写真
があ「た。新たなことに挑戦することを、静
かに、力強く讃える文が添えられていた。
副生徒会長に立候補することも喜んでくれ
た。副生徒会長立候補紙面を見せると、これ
は「すごい、がんば「たね」と言「てくれた。
ごく一部の、心無い人達が向ける眼差しに
苦しめられていたときも、声をかけてくれた。
私は、吐き出すように苦しみを打ち明けた。
先生は、静かに話を聞いてくれた。ただ、
その場では特に何かを言うことはなかつた。
返事をくれたのは、次の日だ「た。一日、

20x20

家で考えてきたりだ「という。
「もしも自分だ。下ろこんで風に考えるよ」
と先生は話し始めた。
私の悩み一つひとつについて、この場合は
こう考える、この場合はこう判断する、と細
かく語「てくれた。こうしなさい、ああしな
さい、とは一切言わなかつた。
その話を聴きながら、私はまたそれを自分
のことに当てはめて考え直し、少しずつ心が
整「て行くのを感じた。
「す」と守られていたんだ、と改めて思「つた。
先生は、指示を出さな「い。寄り添「って、私
が自分で決断するよう「見守「てくれている。
先生は、すぐに返事をしな「い。最善の答え
と異なるように、し「かりと考えてくれている。
先生は、自分の話しかしな「い。自分のこと
として扱え、どう判断するかを深く突き詰め
て、背中を見させてくれる。
そんな若林先生が大好きだ。

20x20

～くすのき先生からのひと言～

生徒会役員への立候補。決断すること、ベストを尽くすこと、中傷への悩み。その一つ一つを受け止め、見守り寄り添ってくれる先生のまなざしのなんと温かいことでしょう。

特別賞

最優秀学校賞

福岡教育大学附属小倉小学校

優秀学校賞

福岡教育大学附属福岡小学校

千葉大学教育学部附属小学校

静岡大学教育学部附属浜松小学校

審査委員長 講評

この「作文・絵作文コンクール」のテーマは、「先生へのメッセージ」や「先生との思い出」です。第5回目を迎えた今年も全国の国立大学の各附属学校から、たくさんの素晴らしい作品の応募がありました。

全国どの学校においても、新型コロナの影響で変わらざるを得なかった子どもたちの学校生活について、現在はアフターコロナに向けての再度の見直しをすすめ、安心安全な学校生活のために、そして確かな学びのためにご苦労をされています。ただでさえ、社会環境の変化に伴い、教育現場に求められるものは増える一方です。にもかかわらず、働き改革がいわれる中で、様々な業務をこなさなければならない先生方は、その働く時間の確保にまで頭を悩ませていることとおもいます。

私が大学の授業で、学生にむけて話す「教師に求められる資質」というものがあります。たとえば、厳しいけれども親しみやすい、まじめだけれどもユーモアがある、几帳面だけれどもおおらかである、積極的であるけれども慎重である、計画的であるけれども柔軟性がある、わかりやすく教えることができるけれども子どものこだわりにはじっくりと付き合うことができる、社会人としての常識や理性があるけれどもみずみずしい子どもの感性を失っていない。といったものです。こうした一見矛盾するようなことが一人の先生に求められるのです。応募作品には、日々の様々な業務をこなしながら、子どもたちの前では、まさしくこうしたことを体現した、魅力あふれる先生がたくさんいらっしゃいました。そうした先生に対する信頼や尊敬や感謝の気持ちを読み取ることができ、審査をしながら心動かされる作品がたくさんありました。

子どもたちとの毎日に、そして先生方の人生にたくさんの笑顔があることを心より祈っています。

審査委員長 児童文学作家 くすのき しげのり

審査委員長 略歴

1961年生まれ、徳島県鳴門市在住。鳴門教育大学大学院修了。小学校教諭、鳴門市立図書館副館長を経てオフィスKUSUNOKIを設立。現在は作家として児童文学を中心とする創作活動と講演活動を続けている。

絵本『おこだでませんように』（小学館）が2009年度全国青少年読書感想文コンクール課題図書に、2011年には、IBBY（国際児童図書評議会）障害児図書資料センターが発行する推薦本リスト「世界のバリアフリー絵本」に選出される。同作品で第2回JBBY賞バリアフリー部門受賞。2013年には『メガネをかけたら』（小学館）が全国青少年読書感想文コンクール課題図書に選定される。『ええところ』（Gakken）、『ともだちやもんな、ぼくら』『ええことするのは、ええもんや』（共にえほんの杜）『ダメ！』（佼成出版）『しょうじき50円ぶん』（廣済堂あかつき）等、教科書掲載作品をはじめ、『Life(ライフ)』（瑞雲舎）、『あなたの一日が世界を変える』（PHP研究所）『海の見える丘』（星の環会）、「いちねんせいの一年間」シリーズ（講談社）、「すこやかな心を育む絵本」シリーズ（廣済堂あかつき）など、200タイトルを超える作品は、日本および海外で広く読まれている。

- ・日本児童文芸家協会評議員
- ・絵本応援プロジェクト代表

- ・徳島児童文学会会長
- ・四国大学文学部非常勤講師
（絵本・児童文学創作）

オフィシャルホームページ

<http://www.kusunokishigenori.com/>





- 主 催 一般社団法人 全国国立大学附属学校PTA連合会
- 担 当 広報委員会
- 発行日 令和5年